



第 33 期日本ロシア学生交流会 関東本部 報告書

日本ロシア学生交流会代表
上智大学 2 年 本橋 絢音

日本ロシア学生交流会は設立以来 30 年間、学生という立場を利用して様々な交流事業を行ってまいりました。「近くて遠い存在」、「不思議な国」というレッテルを貼られることの多いロシアの魅力をどのように日本中に発信するかということを軸に置きつつ活動をしてきました。しかしながら、2020 年という年は我々にとっても記憶に残る 1 年となってしまいました。COVID-19 という新型コロナウイルス感染症により今まで行ってきた活動が思うようにできず、例年に比べ活動が自粛されることが多々ありました。しかしながら我々は 2020 年度に大きなイベントを 2 つ成功させることができました。この活動では、ロシアやユーラシアという地域の魅力を日本人に伝えることができ、さらにロシア語やロシアに興味のある学生に向けて、今後の人生について考えるきっかけを与えることができました。また、今年度は ZOOM 等を用いたオンライン上での交流を初の試みとして行い、来年度以降も活動の一つとして続けていきたいと思いました。外国への渡航が制限されているため、毎年開催していた訪日・訪露企画を行うことができない代わりに、弊社と提携をしている大学の日本語学科に所属しているロシア人たちとのオンライン交流事業を来年度はより活発に行っていきたいと思えます。

このような状況の中、大きなイベントを成功することができ、また通常のオンラインでのイベントが成功することができたのは、この 30 年間日本とロシア間の交流関係を支えてくださった歴代の先輩や先生方を初め、会員の皆様の熱意とロシアに対する思いであり、心から感謝申し上げます。

世界情勢が読めない中での活動にはなりますが、来年度の弊会の運営も学生らしく日本とロシア間の友好的交流活動を目指していきます。今は小さな活動かもしれませんが、いつか日本とロシア間の交流全体の促進につながると信じています。最後になりましたが、来年度の活動に向けて引き続き助成財団をはじめとした多くの方の御支援と御協力を賜りますことを改めてお願い申し上げます、決意の御挨拶とさせていただきます。

外国語の学習は 100 メートル走ではなくマラソンです。毎日学習を続けるという強い意志、つまり、持続的で高い動機付けがなければ、どの言語の習得も難しいと言えます。少し大袈裟な言い方かもしれませんが、学習の環境や言語への適性に問題があったとしても、高い動機付けさえあれば、習得は進むという意見もあるくらいです。

昔、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語などの学習者を対象とした動機付けの研究を行ったことがあります。その結果、意外にも、学習者の中には「ロシア語が楽しい、勉強したい」と感じている人が多く、学習の初期段階では動機付けの値が全言語の中で最も高かったのです。しかし、学習が進んでいくと動機付けは下がってしまいます。ロシア語は名詞や動詞が複雑に変化をするので、「へんか」というか「へんげ」だろうと（教員になった今でも）ボヤきたくなりますが、こういったことが理由で、最初に抱いていた高い動機付けがしぼんでしまうのでしょうか。実際、日本国内にいながらロシア「語」への動機付けを維持するのは簡単なことではありません。英語のように仕事で使える職種は限られていますし、ロシア人と交流する機会にもなかなか恵まれません。

教員としてこれではいけないと思い、2019年にペテルブルグのロシア人高校生を大学へ招待して交流会を実施しました。茶道体験、鎌倉散策、そして演劇公演などを3日間の日程で行いましたが、これに参加した弊学の学生はロシアでロシア人生徒と再会を果たしたり、ホームステイ先として受け入れてもらったりと、いまだに交流を続けています。これを機にロシア語の学習に力が入るようになった学生もいます。初めてロシア語を使う場面に身をおいた経験が学習の刺激となったのでしょうか。

ただ、たった一度交流会に参加しただけでは、習得の難しい格変化や動詞の体に年月をかけて挑んでいく気にはなれません。勤務校では幸いにもロシア語を前のめりに勉強してくれる学生に出会うことがありますが、彼らが次第にやる気を失っていく場面を幾度となく見てきました。ロシア語を使うシーンがイメージできない、ロシアを感じるシーンに出くわさないのが原因の1つではないだろうか、個人的には感じています。

このような状況で日露学生交流会が担っている役割は大きいと考えています。日露間の最前線で活躍されている方々を招いて、講演をしてもらう「ミチター」をはじめ、「プラズニク」という文化イベント、訪日・訪露といった諸イベントは、教室ではできないやり方で学生のロシアに対する興味を刺激してくれます。イベントに参加した学生の数は多く、ロシアを実際にイメージするきっかけを得ることができたはずで

2020年度は弊学の学生が中心となって、交流会の運営をしていました。学生を中心として上記イベントが実現できてしまうなんて、そのエネルギーに一から十まで驚かされます。これからも交流会の活動を通して多くの人がロシアの面白さを触れ、そして、いつかそれが参加者の将来の夢に繋がることを願っております。

第1章 日本ロシア学生交流会について

1. 1 当会の沿革
1. 2 関東本部について
1. 3 これまでの主な活動

第2章 2020年度の活動について

2. 1 年間活動概略
2. 2 年間収支報告
2. 3 今後の展望

第3章 補足

3. 1 「プラーズニク」について
3. 2 「ミチター」について
3. 3 ロシア料理会について
3. 4 その他オンラインでの活動について

第一章 日本ロシア学生交流会について

1989年、ソ連を含む東欧諸国は激動の年であった。現地への渡航もままならない中、ソ連に赴き現地で同世代の学生たちと直接ひざを付き合わせて語り合おうと考えた学生有志がいた。彼らは同年6月、当会の前身となる「日ソ学生交流会」を設立した。当時はソ連に関する正確な報道も少なく絶対的な情報量が不足していたが、得られた僅かな情報を元にして毎週のように「ソ連とは、新生ロシアとは何か」と熱い議論を交わしていた。当初2年間はモスクワを訪問し、とにかく現地の学生との対話をしようという意気込みの元に活動していたが、ソ連・ロシア激動の時代で交流先を見つけることすら困難だった。そのような中、財団からの助成金が一時打ち切られ、やむなく自費でモスクワへの渡航が2度実施された。格安航空券の無いこの時代に「学生が自費で」渡航するのに必要な資金集めに際しては、想像を絶する苦労があった。

1994年、厳しい状況が続く中、会員のカンパによって第1回訪日企画が敢行され、モスクワから1名の学生を招致することができた。

1995年は、当会にとって大きな転機の年になった。シベリア地域最大の都市にして、ロシア第三の都市、ノヴォシビルスク市の学生と新たに定期的な交流事業が開始される運びとなったのである。ノヴォシビルスクには日本語を教えている高等教育機関が複数あるが、当時は主にノヴォシビルスク国立大学の東洋学部との交流を継続的に実施した。ここで、ノヴォシビルスクと当会の交友関係にいたる経緯も大変興味深く特筆に値する。1995年当時に当会の顧問を務めてくださった和田氏とフロロヴァ女史との出会いである。和田氏は、第二次世界大戦で強力な軍事力を誇ったソ連に鮮烈な印象を抱いたことからロシアに関心をもっていた。そこで、長年に渡る金融マンとしての職業人生を引退された後は精神的にロシアの大学を回って日本語学習の指導をなさっていた。また、自ら多くの在日ロシア人留学生の身元保証人として活動されるなど、日ロ両国の架け橋になろうとご尽力なさった方でもあった。あるとき同氏がノヴォシビルスクを訪ねた際、当時日本との交流が皆無に近かった同地で日本語を教えている教授がいると知った。その教授こそがフロロヴァ女史である。彼女はソ連邦成立直後の幼少時代に中国東北部へ亡命し、「満州国」に成り代わった同地の日本人学校に入学した。その後、高等女子学校まで日本語による教育を受け、フルシチョフ時代のソ連に帰国して大学で教鞭をとった。フロロヴァ女史の半生には常に戦争がついてまわった。和田氏とフロロヴァ女史は、戦争の記憶という共通項で結ばれて意気投合し、両氏が仲立ちとなって日ロ間学生交流の芽を育もうということで意見の一致を見た。当時フロロヴァ女史の勤務していたノヴォシビルスク国立大学に本会の姉妹サークルとして「東洋クラブ」を結成し、万全の受け入れ態勢が整ったところで第1回ノヴォシビルスク訪問事業が実行された。それまで一貫してきた「ホーム・メイド」の交流活動をモットーとして継

続し、当会の活動を重ねた。

1996、97年は春先、桜の蕾がほころぶころに訪日企画を実施し、思い出作りには絶好の企画となった。築地の魚市場を訪れて市場関係者に突撃インタビューを試みたり、レンタカーを借りて富士山に登ったりと、バリエーションと新鮮さに富んだ活動を行った。日本の家庭を知ってもらうことを目的としたホームステイ事業を本格的に始めたのもこの頃である。訪日企画に際してはロシア側と「財団の助成金に関する覚書」に署名・調印を行うなど、組織としての関係強化について協議が重ねられた。また、失敗に終わってしまったが、ロシア極東地域のブリヤート共和国にあるウラン・ウデ国立大学との交流開始を模索した年でもあった。

1998年からはそれまで2期に渡って同年中に行なっていた訪日・訪日企画について、主に財政的理由からそれぞれ隔年開催とすることに決定した。当時の基本的な方針としては、訪日・訪日企画を隔年開催にする代わりに1回ごとの交流事業の規模を拡大し、ロシア側との間にこれまでと同等の交流密度を維持していく、というものであった。その具体的な表れとして、当会会員の実家に出向く「地方企画」など新企画が次々と打ち出された。訪日事業においても同様の路線がとられた。

1999年には新しい試みとしてモスクワ再訪問を行い、現地の学生(プレハーノフ記念経済大学内の国際学生交流サークルであるIAESTEのメンバー)との交流が再開した。

2001年の夏よりモスクワ郊外の街リヤザンとの交流が開始された。ノヴォシビルスクとの交流も現地メンバーが大きく入れ替わり、さらに活動は充実した。

2009年、本会は前身の日ソ学生交流会時代も含め20周年を迎えた。この間当会からは長峯誠参議院議員をはじめとして広く社会で活躍する人材を多数輩出している。

2011年の春には嘗てから望んでいた関西本部を設立した。大阪大学・同志社大学の学生を主な会員としている。同年8月にはリヤザンから4名を関西に招致して10日間の訪日企画を行った。同時に訪日企画も行ったため、1997年を最後に途絶えていた訪日・訪日企画の同時開催を果たす運びとなった。

2012年は関東関西2本部体制の中で4都市間同時交流という新しい試みを始めた。関東からノヴォシビルスクへ、関西からリヤザンへ、また、ノヴォシビルスクから関西へ、リヤザンから関東へ、と2つずつの訪日・訪日企画が実施された。この試みは現在も続けられている。

2013年3月には『日ロ学生シンポジウム』を行った。外部の方々を招いての斬新かつ大規模な企画を皮切りに、北方四島学生交流企画への参加など多岐に渡って活動が実施された。新会員を迎え会員数は関東本部だけでも50名にまで膨らみ、本会は量、質ともに飛躍的に発展を遂げる年となった。

2014年では新たな試みとして東京大学の学園祭である駒場祭での出店を行ったことで、本会の活動・ロシアのことについて一般の人に広く知ってもらうきっかけとなった。

2015、16年には会員数が増加、これまでの主な参加大学である東京大学、東京外国語大

学、上智大学に加え、慶應義塾大学や東京理科大学、法政大学など様々な大学から会員が集まるようになり、活動に活気が生まれた。

2017 年には、2016 年度に天候不順によりやむなく中止した北方領土への訪問を果たした。更には、2013 年度に開催された『日ロ学生シンポジウム』を『ミチター』と改め再開する運びとなった上、駒場祭に加えて東京大学のもう一つの文化祭である五月祭へも出店を行い、活動の幅を大きく広げる事となった。

また、本年から当会の関西支部が「セーミチキ」として名を改め別組織として独立した。

2018 年度は、北方領土に住むロシア人とのビザ無し交流、五月祭への出店、シンポジウム『ミチター』を開催した。また、新たな試みとして、ロシア語を勉強する高校生を招待したロシア料理会や、タタールスタン共和国の首都、カザンとの交流を目的とした「カザン班」の設立、活動を行った。

2019 年度も 2018 年同様、シンポジウム『ミチター』を開催した。また、ロシア語教室、料理会、バラライカ教室なども開催した。

2020 年度 2 月 23 日・24 日には日本ロシア学生交流会 OB 主催で「第一回ロシア・ユーラシア文化祭『プラーズニク』」を開催した。また 9 月 21 日にはシンポジウム『ミチター』をオンラインで開催した。

1. 2 関東本部について

関東本部は 1989 年に設立された日ソ学生交流会を前身として、現在に至るまでノヴォシビルスク・リャザンとの学生間交流を中心とした活動を行ってきた。近年は訪日・訪ロ企画以外にも、北方領土を訪問するビザなし交流への参加、駒場祭への出店など活動は多岐にわたっている。会員の中心メンバーは上智大学・東京大学・東京外国語大学の学部 1、2 年生だが、OB・OG の方々の努力もあり、早稲田大学・慶應義塾大学など様々な大学から参加を受けている。会員はロシア語が専攻・第二外国語の学生に限らず、ロシアやその周辺地域への関心、学生交流への興味などで当団体に入る者も多くなっている。また、今年度は OB・OG の活動への参加も積極的に受け入れた。ロシアについてのみならず団体活動に関する知識、経験に富んだ OB・OG の参加は心強く、来年度もこの姿勢は継続することが見込まれる。

1. 3 これまでの主な活動

| | |
|--------------|---------------------------|
| 1989 年 6 月 | 日ソ学生交流会結成 |
| 1990 年 8 月 | 第 1 回訪ソ企画日本人 13 名をモスクワへ派遣 |
| 1992 年 8 月 | 第 2 回訪ソ企画日本人 13 名をモスクワへ派遣 |
| 1993 年 7,8 月 | 第 3 回訪ロ企画日本人をモスクワ・極東へ派遣 |

- 1994年 第4回訪日企画日本人をモスクワ・極東へ派遣
第1回訪日企画ロシア人1名をモスクワから招致
- 1995年8,9月 第5回訪日企画日本人7名をイルクーツク・ノヴォシビルスクへ派遣
- 1996年3月 第2回訪日企画ロシア人学生8名・教師1名をノヴォシビルスクから招致
8,9月 第6回訪日企画日本人10名をイルクーツク・ノヴォシビルスクへ派遣
- 1997年3月 第3回訪日企画ロシア人10名をノヴォシビルスクから招致
- 1997年8,9月 第7回訪日企画日本人8名をノヴォシビルスクへ派遣
- 1998年8月 第4回訪日企画ロシア人10名をノヴォシビルスクから招致
- 1999年8,9月 第8回訪日企画日本人16名をモスクワ・ノヴォシビルスクへ派遣
- 2000年8月 第5回訪日企画ロシア人9名をノヴォシビルスクから招致
- 2001年8月 第9回訪日企画日本人10名をノヴォシビルスク・リヤザンへ派遣
- 2002年8月 第6回訪日企画ロシア人をノヴォシビルスクから7名、リヤザンから5名
招致
- 2003年8月 第10回訪日企画日本人13名をノヴォシビルスク・リヤザンへ派遣
- 2004年8月 第7回訪日企画ロシア人をノヴォシビルスクから6名、リヤザンから3名
招致
- 2005年8月 第11回訪日企画日本人10名をノヴォシビルスク・リヤザンへ派遣
- 2006年8月 第8回訪日企画ロシア人をノヴォシビルスクから5名、リヤザンから9名
招致
- 2007年8月 第12回訪日企画日本人7名をノヴォシビルスク・リヤザンへ派遣
- 2008年8月 第9回訪日企画ロシア人をノヴォシビルスクから3名、リヤザンから10
名招致
- 2009年8月 第13回訪日企画日本人13名をノヴォシビルスク・リヤザンへ派遣
- 2010年8月 第10回訪日企画ロシア人をノヴォシビルスクから7名、リヤザンから7
名招致
- 2011年5月 日本ロシア学生交流会関西本部発足
8月 第14回関東本部主催訪日企画日本人14名をノヴォシビルスク・リヤザン
へ派遣
- 2012年8月 第11回関東本部主催訪日企画ロシア人10名をリヤザンから招致
第15回関東本部主催訪日企画日本人5名をノヴォシビルスクへ派遣
- 2013年8月 第12回関東本部主催訪日企画ロシア人8名をノヴォシビルスクから招致
第16回関東本部主催訪日企画日本人10名をリヤザンへ派遣
- 2014年8月 第13回関東本部主催訪日企画ロシア人9名をリヤザンから招致
第17回関東本部主催訪日企画日本人10名をノヴォシビルスクへ派遣
- 2015年8月 第14回関東本部主催訪日企画ロシア人6名をノヴォシビルスクから招致
第18回関東本部主催訪日企画日本人8名をリヤザンへ派遣

2016年8月 第15回関東本部主催訪日企画ロシア人6名をリヤザンから招致
第19回関東本部主催訪日企画日本人10名をノヴォシビルスクへ派遣

2017年8月 第16回関東本部主催訪日企画ロシア人9名をノヴォシビルスクから招致
第20回関東本部主催訪日企画日本人10名をリヤザンへ派遣

2018年8月 第17回関東本部主催訪日企画ロシア人6名をリヤザンから招致
第21回関東本部主催訪日企画日本人6名をノヴォシビルスクへ派遣

2019年8月 第18回関東本部主催訪日企画ロシア人6名をノヴォシビルスクから招致
第22回関東本部主催訪日企画日本人11名をリヤザンへ派遣

2020年 COVID-19 新型コロナウイルス感染症で中止

第2章 2019年度の活動について

| 〈年月〉 | 〈活動〉 |
|----------|--------------------------------------|
| 2020年2月 | ロシア料理会開催 「ロシア・ユーラシア文化祭『プラーズニク』」開催 |
| 2020年4月 | 新歓活動（オンライン） |
| 2020年9月 | シンポジウム『ミチター』開催 |
| 2020年10月 | 大使館主催ロシア交流イベント参加 |
| 2020年11月 | 大使館主催ロシア映画観賞会参加 |

・収入（作成 代表 本橋絢音）

| 項目 | 金額（円） |
|-------------|--------------|
| 昨年度引き継ぎ | 131,942 円 |
| 平和ナカジマ | 400,000 円 |
| 『プラーズニク』売上金 | 136,120 円 |
| 入会金 | 3,000 円×27 名 |
| 計 | 749,062 円 |

・支出

| 項目 | 用途・金額（円） |
|----------|---|
| 料理会 | 施設代 6,400 円 食費代 10,000 円 |
| 『プラーズニク』 | 備品 40,102 円 |
| 『ミチター』 | 冊子作製費 51,025 円 謝礼費 10,000 円×5 名+3,684 円 53,684 円 |
| | 計 104,709 円 |
| 計 | 161,211 円 |

今年度は活動が自粛されましたが、『プラーズニク』や『ミチター』ではよい喧嘩を残す

ことができました。『プラーズニク』は、日本ロシア学生交流会としてウクライナ発祥の伝統料理ボルシチを販売しました。このイベントの中で一番の売り上げ業績を残し、ビーツのスープで心も体も温まることができたと思います。『ミチター』では、例年とは異なりYouTubeでのライブ配信というオンライン上での開催となりましたが、多くの方が当日見てください、実りあるものであったように思います。この『ミチター』のために多くの運営チームの学生が、4月から登壇者へのインタビュー、冊子作製、SNSでの宣伝活動、ライブ配信技術の研究等にかかわっていただきました。

来年度は今年度の経験を活かし、よりオンラインでのイベントに挑戦し、より多くの人にロシアという国に親しみを持っていただくという所存です。来年の活動も会員の皆様、毎年御理解と御協力を頂いている助成財団のお力には成し得ないものです。今後とも日本ロシア学生交流会を、どうぞよろしくお願い致します。

第3章 補足

1 ロシア・ユーラシア文化祭「プラーズニク」について

2020年2月23日、24日の2日間、港区芝公園4号地にて行われた「ロシア・ユーラシア文化祭『プラーズニク』」は、日本ロシア学生交流会のOB主催のイベント。1年以上かけて計画されていた計画であり、両日ともに来場者が多く、大盛況に終わった。当日は、弊会のボルシチを初め、ウォッカの販売・試飲、中央アジアの伝統ダンスの披露、民芸品販売、日本で有名なロシア人声優ジェーニャさんのトークショーも行われた。

2 ロシア就職関係シンポジウム「ミチター」について

今年度で4回目となる弊会のメインイベントの1つ。学生時代にロシアに携わる仕事の存在を認識せずに、就職活動を終えてしまうという現状を打開するために、日露間の最前線で活躍されている業務形態の多様な社会人を召喚したシンポジウムを行っている。今年度は新型コロナウイルス感染症により、当日の様子をYouTubeでライブ配信するという形をとった。主な来場者・視聴者は、ロシアについて一定の知識や見解を持つ者を中心に、「ロシア」に可能性を感じている者である。登壇者・参加者の各々に有意義な印象を与えるような企画を作り上げ、ロシア関連におけるキャリアの展望を拡充している。

3 ロシア料理会について

当日はロシア人やベラルーシ人の留学生も招いて教えてもらいながらロシア料理などの伝統料理を作った。ロシア人との交流だけでなくインターカレッジとしての特色として他大学の、他学年の学生との交流もでき、意見交換やロシア語学習の仕方等も学ぶことができた。

4 その他オンラインでの活動について

今年度は、ロシア大使館主催のオンラインイベントに任意の学生が参加した。内容は主に、ロシアの地方都市について学ぶものや、ロシア・ソ連映画をイーゴリ・チトフ文化担当参事官の説明と共に鑑賞するというものであった。普段知ることのできないロシア地方の実態や、ロシア人ならだれでもわかる映画フレーズなどを学ぶことができた。